自己紹介作文

北原 絢音(バイオリン講師)

立派な人って言われますが・・

私は、名前を見た人に「親御さんもあなたがこんな立派な音楽家になって嬉しいだろうね。」と言われることがよくあります。
「あはは～、そうですかね～。」なんて笑ってやり過ごしつつ、「うううう苦しい…親泣かせの馬鹿な娘だなんて言えねえ……泣」と胸の内で答える私が、歩んできた道や今考えていることについて自己紹介に代えて綴らせていただこうと思います。

母から絶対藝大と言われて・・

元々、どういうわけかとにかく真面目な人間でした。
何でも一所懸命やらなければいけない、やると決めたことは絶対にやりきらなければいけない、と、それができなければ死ぬかのようなレベルで強く思い込んでいました。
そんな真面目すぎる人間は「あなたを絶対に藝大に行かせる」と日々呪文のように繰り返す母親の側で、当然のように「何がなんでも藝大に入らなければ」という意識を強く持ち、バイオリンの練習に励むようになりました。

辛かった高校時代・・

しかし、高校生になって少し視野が広がってくると、藝大合格を目標に掲げながらもバイオリンを弾くことへの興味が次第に薄れていっていることを感じ始めました。それまで自分の興味のことなど考える余裕がなかった、というか考えようという思考にすら至らなかったため、初めての感覚に戸惑いましたが、誰にも言えませんでした。よく「いつも笑ってるね」と言われていた私でしたが、この頃からあまり笑わなくなり、「その不満そうな顔なに？」と言われたりもしました。
肝心の受験が近くなった頃にはだいぶバイオリンに向かうことが苦しい精神状態になっており、今考えても恐ろしいですが「藝大に合格したらバイオリンをやめる」というあるまじき目標を掲げてどうにかモチベーションを維持し、藝大に入りました。

バイオリンをやめたい・・

大学生の間、私はバイオリンと距離をとり、他に興味をもったことに時間とお金を使うなかで、自分のカフェを開きたいと考えるようになりました。

そして四年生になる頃、家族に「私が不自由なくバイオリンを続けるために様々なことを犠牲にして支えてくれたのだから恩は返したいけれど、今後もバイオリン中心の人生を送って恩返しすることは自分には難しい。新しいことをしたい。」と、バイオリンをやめたいことを初めて伝えました。

家族はみんな泣いていました。特に母親は、私の決断をなかなか受け入れられず、とても辛そうでした。

興味がカフェ業に・・・

バイオリンをやめてから、私はカフェ開業に向けて動き始めました。

食の勉強がとてもしたかったので短大で栄養学を学び、その後就活で出会ったとても心惹かれるパン屋さんに勤めました。

そのパン屋さんは、店員全員がお客様を大切にしていることが痛いほど伝わってくる、優しい人たちが集まった本当に素敵な場所でした。一人一人が「お客様に幸せな気持ちで帰っていただきたい」という気持ちに突き動かされるように行動を起こし、店内のあちこちで温かみあふれるやり取りがされている様を目の当たりにし、私は凍っている心が溶かされていくような感覚を覚えました。そのような空間にしばらく身を置いたことで、人の反応を気にして引っ込みがちな私も「こうしたら喜んでもらえるかも！」と感じたまま素直に行動をとることが増え、お客様の温かい笑顔や言葉を沢山いただいて、気付けばまた笑っていることが多くなりました。

もう一度バイオリンに・・・

その時はっとしました。

「私、人のためにバイオリン弾いていたか？」と。

恥ずかしながら、「藝大に入る」「コンクールに入賞する」といった自分の目標を達成するための手段のようにバイオリンを使い、人に演奏を聴いていただくことは沢山あったのに、心から喜んでもらいたいという気持ちをもってバイオリンを弾いたことがなかったのです。だから、どんなに「絢音ちゃんのバイオリンが聴きたい。」「素敵だったよ。本当にありがとう。」という温かい言葉をもらっても、全然心に響いてこなかったのだと、この時になってようやく気付きました。。。全く呆れるものです。

私も習い事をしてみて・・・

現在私は、様々な方と喜びを共有したいとの思いをもってバイオリンと料理の仕事にあたりながら、新たに習い始めた DTM の宿題に追われる充実した日々を送っています。

自分も音楽教室で習い事をする身になって、大人になって初めて楽器を習う方の感覚のようなものが以前より少しわかったように感じます。

レッスンでは、できる限り生徒さんの考えに寄り添うよう心掛け、楽しみながら上達していただけるよう努めますので、どうぞよろしくお願いします。

つづく音楽教室が生徒様の希望をのせて花開いていくことを、心からお祈りしています。